



Gourd Remains from Ancient Sites at Koushoku, Central Japan

辻 誠一郎

はじめに

- ① 更埴条里遺跡・屋代遺跡群
- ② 植物利用を中心とした植生史の概要
- ③ ヒョウタン *Lagenaria siceraria* Standl. の遺体
- ④ 他の注目すべき植物遺体
- ⑤ 古代植物誌と人と植物の関係史



長野盆地南部に位置する更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古代の植物遺体群のうち、日本では最大の資料数であるヒョウタン遺体、およびアサ、ササゲ、モモ遺体の産出と利用を再検討した。その結果、古代の植物利用と農業経営に関して新しい知見を得た。

古代のヒョウタン遺体の資料数は90点におよび、古代から中世まで連続的に時代を追うことができ、また、果実・種子の形態が多様性をもつものであった。果実の形態からは、タイプA～タイプGの7つのタイプが設定され、種子の形態も複数の系統の存在を支持した。このことから、ヒョウタンの多様性とこの地域におけるヒョウタン利用の多様性が確かめられた。多様なヒョウタンの果実は加工して利用されたが、球形に近い果実は杓に利用され、祭祀具として利用されたと考えられた。他のヒョウタンの果実も形に応じた加工が施され、容器として利用されたと考えられた。食用となる大型のユウガオ型の果実が中世以前では初めて遺体で確認された。

他の三つの注目すべき植物遺体とその産出状況を記載した。第1は、押りかす状態のアサの果実についてである。『延喜式』に記載された信濃国の貢納品である麻子を裏付ける事実である。第2は、ササゲに同定されるマメ科の炭化種子についてである。家屋の焼失時に炭化したと考えられるもので、当時の豆の保存の仕方を示す状況証拠である。第3は、加工されたモモの核についてで、刃物によって加工した笛であると考えられた。

古代の更埴は、たくさんの畑作物としての栽培植物を育成しており、多産するヒョウタンやモモは多様で、生産母体が大きいことを示唆した。それらが水田稲作を主体とすると考えられてきた農業経営とどのようにかかわっていたのかの検討を促した。